

令和 3 年 6 月 11 日現在

機関番号：32665

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18K00294

研究課題名(和文) 帝国日本の空間フレームと非識字読者をめぐる文化翻訳の抗争に関する研究

研究課題名(英文) A study of resistance to cultural translation regarding the spatial frame of the Empire of Japan and people who lacked literacy

研究代表者

高 榮蘭 (KO, Youngran)

日本大学・文理学部・教授

研究者番号：30579107

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：1930年前後は帝国日本の出版資本が植民地および軍事占領地域を市場としていた時期である。本研究は、植民地朝鮮出身の読者、とりわけ識字能力のない人々までもが、帝国日本の合法/非合法出版市の担い手たちによって「読者」として欲望されていたこと、植民地朝鮮の読者が日本語メディアを積極的に欲望していたこと、さらに、みずから「日本語」を拡散させるメディアとなっていたことに注目したものである。本研究は、帝国日本の空間フレームを参照軸としながら、によって作られる新たな文化の編成をめぐる「言語-階級」間の抗争と、それをめぐる記憶が、冷戦構図を媒介に、如何に歴史化されたのかを明らかにしたものである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

加害/被害、記憶/忘却、戦前/戦後などの二項対立的な思考構図は、第2次世界大戦以後線引きされた国民国家の土台の上で構築されたものである。しかし、本研究は、日本や韓国など、現在の国民国家単位の思考ではとらえることの出来なかった、新たな研究の枠組みの提示につながり、英語圏における「東アジア」学をめぐる線引きに対しても、再考を求めるものになるだろう。このような研究を進めることによって、公式的なものとして承認されたもの、主に著名な知識人が書いた「資料 言葉」だけに自閉しやすい、研究の領土性自体をとらえなおす契機を見出すことが出来ると期待している。

研究成果の概要(英文)：The period around 1930 was a time during which the Empire of Japan acquired its publishing capital from its markets in the colonies and occupied territories. This study focused on 1) what those responsible for the Empire of Japan's legal/illegal publishing markets desired from "readers" from colonial Korea, especially people who lacked literacy; 2) what readers in colonial Korea actively desired from Japanese-language media; and 3) the way in which readers in colonial Korea acted as agents spreading "Japanese language" media. This study used the spatial frame of the Empire of Japan as a reference to reveal how resistance between "language/class" and memory regarding the creation of new forms of cultural organization were historicized by means of 1), 2), and 3), through the frame of the Cold War.

研究分野：日本の近現代文学

キーワード：非識字読者 空間フレーム 植民地朝鮮 帝国日本 メディア 出版市場 検閲 読者

1. 研究開始当初の背景

これまで、獲得した挑戦的萌芽研究(研究代表者、課題番号:24652051) 基盤研究(C)(研究代表者、研究課題番号:30579107)などを通して、1945年以前の帝国日本の領土内において、日本語・朝鮮語の書物や書き手の移動は、民族別・言語別の境界を侵犯する形で行われたものであり、そこには常に権力との攻防が刻まれていたことがわかった。また、1945年の帝国日本の解体以後、東アジアは米ソによって再編されるが、その過程で、旧植民地であった韓国と日本の間には「文学 文化」をめぐる様々な闇ルートが出来上がり、そこには韓国の軍事独裁政権への抵抗をめぐる、「人・書物・資本」の交錯が介在していたことを明らかにすることが出来た。その過程で、非識字読者の問題と帝国日本の空間フレームの連関関係に対する議論が見落とされてきたことに気づいた。

2. 研究の目的

現在日本の人文学領域において、帝国日本のメディアや文化の問題について考える際、読者に識字能力があることを前提とする。特に、「サバルタン」「ディアスポラ」などのようなキーワードを媒介とする研究方法の導入により、下層階級の漢文・漢字仮名交じり文に対する理解能力の位階構図に注目し、記録 記憶の主体を如何に想定すべきかについて議論を展開することが多い。しかし、1920~30年代を対象とする時、いわゆる「日本人」にだけ適用された義務教育制度を軸に議論の枠組みが作られてしまったために、当時のひらがな、カタカナが分からない、数字の計算ができない「被植民 異民族 読者」のレベルにまで、思考の領域を広げることはほとんどなかった。そのような「読者」が、日本語メディア空間を支えていた可能性について考慮しないのである。それと同時に、これまでの日本語空間をめぐる人文学の研究では、当時、日本の合法/非合法的な出版資本が、識字能力がない読者までをみずからの商品を購入する読者として想定していた可能性、しかもそのような読者が主体的に日本語メディアの読者共同体の一人としての自己認識を持っていた可能性を視野に入れていない。本研究では、上記のような状況を浮き彫りにするために、帝国日本の植民地朝鮮「から」帝国・日本の知の連環を考えるファクターを導入する。

さらに、上記の問題を、情報の広がりを生み出す空間として、日本の帝国大学や朝鮮総督府をはじめとする各種の図書館、古本、露店など、位階的に分類されていた空間の問題に接合させ、検閲などの情報統制と駆け引きしながら、どの空間でどのような媒体が排除され、どのような媒体が移動・拡散していたのかを浮き彫りにする。媒体・読者・空間に介在する民族・階級・資本の問題を明らかにし、それが1945年以後の冷戦構図と遭遇し、どのように翻訳され、歴史化されたのかについてまで、考えたい。それによって「戦後」と「日本 日本人 日本語」という枠組みによって編成される、内向きの構図を問うことができるだろう。

3. 研究の方法

(1) 情報統制化における合法/非合法書物の移動と非識字読者に関する調査

1930年代前後における、合法/非合法出版の植民地読者の包摂にかかわる資料を分析した。メディアの発信者としての出版資本だけではなく、帝国側に対するメッセージ発信ツールとしての、資本を持たない側による「うわさ」「チラシ」「壁紙」「檄文」「ピラ」まで調査対象を広げた。これまでアーカイブ化が難しいと思われたこれらの資料を研究対象とするための努力が行われている。そのアーカイブ作りに関わっている日本、韓国、アメリカの研究者の助言をえなが

ら、1920 年に至るまで非識字者の割合がきわめて高かった、帝国日本の内地、植民地朝鮮での資料、非識字とメディア関係に関する最新の研究手法を積極的に取り入れた。ワシントン大学、ライデン大学、シカゴ大学に長期滞在しながら、帝国日本の検閲を避ける形で、当地で刊行、輸入、流通された資料に触れる機会を得た。特に、ワシントン大学図書館とシカゴ大学図書館に、朝鮮人・日本人亡命者および移住者による非/合法的な資料、占領期の資料、帝国日本の検閲に関する資料、および貴重な地図などが多く保存されていることがわかった。それぞれの図書館の司書である田中あずさ(ワシントン大学)氏、吉村亜弥子(シカゴ大学)氏の全面協力を得ながら、研究を進めていくための基盤を作った。

(2) 冷戦構造下において、「1」での記憶が如何に翻訳され、歴史化されたのかに関する調査

冷戦構図の介在による、朝鮮半島の分断、ソビエト・台湾・中国との政治的な駆け引き、日米関係が複雑に交錯する構図を浮彫にしながら、非識字読者が透明化されてきたプロセスについて調査した。特に、日本、韓国、オランダ、アメリカなどで外交文書・検閲記録・警察や検察による取り調べ記録、裁判記録などを調査した。

(3) 空間フレームに関する基本資料

植民地朝鮮における空間形成をめぐる非文字資料(地図など)の収集および出版、建築物の研究で大きな注目を集めている建築家・富井正憲氏の助言をえながら、資料を集めた。

4. 研究成果

(1) 2018 年度

日本からの情報の入口であった仁川や京城における帝国日本の空間フレームについて調査を進めた。その一環として、1930 年代仁川の空間模様を詳細に記録した『モダン仁川』の著者である戸田郁子さんの講演会(8月15日、仁川文化財団生活文化センター)を企画した。新たな文化の創出の仕組みについて考えるために、ワシントン大学の E・Mack 氏、UCLA の平野克弥氏と共に、Fifth annual Transpacific Workshop “Play” を企画(6月9日、ワシントン大学)した。書物の移動や非/識字読者の問題を考えるために、広島大学の川口隆行氏、大妻女子大学の五味淵典嗣氏、韓国成均館大学の千政煥氏、ワシントン大学の E・Mack 氏との共催で、「ひとの書物と書物の移動 1930 年代、日本語「文学」の問題圏」というワークショップ(11月5日、広島大学)を企画した。二つの共著が刊行された。4月には、Literature Among the Ruins, 1945-1955: Postwar Japanese Literary Criticism (New Studies in Modern Japan)がアメリカの Lexington Books から刊行された。6月には、岩崎稔、成田龍一、島村輝編『アジアの戦争と記憶』(勉誠出版)が刊行された。

(2) 2019 年度

2019 年 9 月 13~14 日に、シカゴ大学の Kyeong-Hee Choi 教授をお招きし、京都大学名誉教授の水野直樹氏とともに、共同研究に関する打ち合わせを行った。高は「帝国日本における検閲空間の交錯」をめぐる発表を、Kyeong-Hee Choi 氏は、英語圏での研究状況に関する報告を行った。日中戦争と非/識字読者の問題を中国・韓国・日本の専門家と議論するために、韓国圓光大学の金ジェヨンさんと毎年一回の学術会議の開催を行うことにし、第1回目の会議を2019年12月14日にソウルで行った。2020年1月10日には、アメリカのワシントン大学で、同大学の E・Mack 氏、大妻女子大学の五味淵典嗣氏、韓国成均館大学の千政煥氏と共催で、出版市場と情報統制に関するワークショップを行った。共著として坪井秀人編『戦後日本文化の再考』(三人社) 翻訳として河野貴美子ほか編『日本「文」学史 第三冊—「文」から「文学」へ—東アジアの文学を見直す』(勉誠出版)の刊行に参加した。

(3) 2020 年度

3年目にあたる2020年度は、これまでの研究成果を発表するための単行本の執筆に力を入れた。現在、出版社も決まっており、2021年度末刊行を目指して執筆を進めている。また、昨年度に引き続き、シカゴ大学のKyeong-Hee Choi教授と共著を執筆しながら議論を深めている。英語・日本語・韓国語での同時出版を目指している。帝国日本における差別的な空間政治の問題について考える際、検閲の問題は避けておれない。シカゴ大学はよく知られている通り、日本の占領期検閲研究に大きな貢献をした、奥泉栄三郎が主任司書を務め、東アジアの検閲資料を多く保有している。Kyeong-Hee Choi氏は、奥泉氏とともにシカゴ大学における朝鮮関連のコレクションの充実化を図ってきた。シカゴ大学の蔵書の形成について調査する過程で、連合軍による日本占領だけではなく、韓国と沖縄における米軍基地の問題がアメリカの主要図書館の空間編成と深い関わりがあることに気づいたことは大きな収穫であった。韓国圓光大学の金ジェヨン教授とは、日中戦争期と冷戦時代の東アジアにおけるアメリカと日本の役割に関する二つの共同研究プロジェクトを運用し、2020年度もそれぞれ2回目の国際会議を行なった。韓国・中国・ベトナム・台湾の研究者たちと共同研究を行いながら、日本帝国の記憶と空間フレームがどのような形でそれぞれの地域に介在していたのかについて明らかにする作業を進めている。その他、韓国日本学会とAASにパネルで参加し、研究成果を発表した。韓国慶熙大学沖縄研究所と共催で三つの連続講演会を企画した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 高榮蘭	4. 巻 829
2. 論文標題 歴史のひろば 「幽霊」の位相をかき乱すためにー和田春樹『「平和国家」の誕生』と権赫泰『平和なき「平和主義」』を手がかりにー	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 歴史評論	6. 最初と最後の頁 68～77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高榮蘭	4. 巻 126
2. 論文標題 翻訳されるレイプと男性セクシュアリティー大島渚『絞死刑』と大城立裕『カクテル・パーティー』のあいだから	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本学報（韓国）	6. 最初と最後の頁 39～59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 高榮蘭・チョウネ・チョンチャンフン・チャンムンソク・高橋梓・渡辺直己	4. 巻 61
2. 論文標題 東アジア冷戦と脱境界的に書くこと	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 尚虚学報（韓国）	6. 最初と最後の頁 517～582
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計11件（うち招待講演 8件/うち国際学会 9件）

1. 発表者名 高榮蘭
2. 発表標題 「戦線」報国をめぐる内鮮「言語／翻訳」共同体 「女流」「小説家」「林芙美子」という磁場から
3. 学会等名 シンポジウム「中日戦争以後の東アジア文学」、韓国KAIST人文社会科学部主催（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高榮蘭
2. 発表標題 日本近現代文学研究をめぐる方法論的な展開 1960年代、「在日」表象を手がかりに
3. 学会等名 University of Washington Japanese Studies Program主催(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 高榮蘭
2. 発表標題 HIROSHIMA・光州をめぐる記憶と連帯の表象
3. 学会等名 国際日本文化研究センター共同研究会「東アジア冷戦下の日本における社会運動と文化生産」主催
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 KO Youngran
2. 発表標題 1989, Okinawa, and Daily Life under the Japanese Flag : The Death of Emperor and the Murakami Haruki Phenomenon
3. 学会等名 Research Seminar Series, Sponsored by Center for Asia-Pacific Initiatives University of Victoria(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 高榮蘭
2. 発表標題 What is Chosenjin(Koreans)? : 1968・Oshima Nagisa・Hinomaru (the Japanese Flag)
3. 学会等名 Workshop: Words and Violence Leiden University(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 高榮蘭
2. 発表標題 レイプの位相と男性セクシュアリティー大島渚『絞死刑』と大城立裕『カクテルパーティー』のあいだから
3. 学会等名 、韓国日本研究団体第9回国際学術会議（韓国日本学会第100回）、韓国日本学会主催（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 KO Youngran
2. 発表標題 "Vietnam War and Japanese Literature (- 2 Vietnam War and World Literature)", "Reading the Globe -9th Asia Africa and Latin America Literary Forum-
3. 学会等名 地球的世界文学研究所、韓国文化芸術委員会主催（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 高榮蘭
2. 発表標題 日中戦争と翻訳される身体 日本女性作家の従軍記を読む
3. 学会等名 東アジア植民地文学研究会、韓国圓光大学共催（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 高榮蘭
2. 発表標題 「植民地」なき植民地議論が「植民地」に遭遇したらー中野重治「雨の降る品川駅」からー
3. 学会等名 社会文学会1月例会、日本社会文学会関東甲信越ブロック主催（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 KO Youngran
2. 発表標題 How does literature talk about neoliberalism, gender, and memory?: Between "Watashi Mo Jidai no Ichibu Desu [I, Too, Am a Part of This Era]" and Sakiyama Tami's "Tsukiya, Aran"
3. 学会等名 AAS 2021 Annual Coference (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 高榮蘭・趙慶喜
2. 発表標題 対談 東アジアを横断する声 痛みを感知する一女性の移住と境界の行為性
3. 学会等名 慶熙大学校グローバル沖縄研究所・戦後沖縄文学と東アジア共同研究チーム共催(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 高榮蘭、坪井秀人編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 三人社	5. 総ページ数 603
3. 書名 戦後日本文化の再考	

1. 著者名 高榮蘭(翻訳)、河野貴美子、Wiebke DENECKE、陣野英則	4. 発行年 2019年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 632
3. 書名 日本「文」学史 第三冊	

1. 著者名 Ko Young Ran, Atsuko Ueda, Michael K. Bourdaghs, Richi Sakakibara, Hirokazu Toeda	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Lexington Books	5. 総ページ数 194
3. 書名 Literature Among the Ruins, 1945-1955: Postwar Japanese Literary Criticism	

1. 著者名 高榮蘭、岩崎稔、成田龍一、島村輝	4. 発行年 2018年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 320
3. 書名 アジアの戦争と記憶	

1. 著者名 高榮蘭 / 全南大学校日本文化研究センター編	4. 発行年 2021年
2. 出版社 キョンジン出版	5. 総ページ数 410
3. 書名 韓日文化交流の表象3 (韓国語)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計6件

国際研究集会 Fifth annual Transpacific Workshop "Play" (ワシントン大学との共催)	開催年 2018年～2018年
国際研究集会 ひとの書物と書物の移動 1930年代、日本語「文学」の問題圏 (広島大学との共催)	開催年 2018年～2018年

国際研究集会 帝国日本における検閲空間の交錯（シカゴ大学との共催）	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 中日戦争以後の東アジア文学 第1回（韓国圓光大学との共催）	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 中日戦争以後の東アジア文学 第2回（韓国圓光大学との共催）	開催年 2020年～2020年
国際研究集会 対談シリーズ 東アジアを横断する声（慶熙大学校との共催）	開催年 2020年～2020年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------